

## うねり

どす赤いユリの花の傍で  
絶望が嘘を吐いていたことを知った  
一見優しさに満ちた嘘

その遥か向こうでは  
庭に咲き広がり  
きらりと光っている素粒子の花々

(蝶のように飛び回る糸  
目に見えぬ呪縛として)

自己、自己、自己・・・無数の自己  
他者でない者としての自己  
ああ、そんな自己なんて棄ててしまえ

見ることを拒んでも  
逃亡する場所など何処にもなく  
黒い鳥に追いかけられ続ける

(むき出しの細胞壁でできた壁  
その中から滲み出る血漿)

呼吸する空気が足りない  
狭すぎ、なお近寄ってくる空間  
自身に思考を強要し、喚き散らす自己

意思を無視し始めた四肢  
非常口を失った階段をひたすら上る  
——生存への嫌悪、嘔吐

(社会ではない世界  
生命ではない同胞は何処だ)

\*

切れ目なく続くかと思われた時間  
揺れ続けていた地平  
それらがびたりと静穏になっている

無意識に辿り着いたそこ  
砂漠のように乾いた異次元の広がり  
無であって、同時に充溢である・・・

(お前には感じることはできまい  
お前には理解できまい)

押し寄せてくる、うねり  
どこからともなく、そして次々と  
どうしたのだろう

我々はただ  
じっと肌を触れ合わせていただけだ  
それなのに

(ここは何処だ  
あの喚き声は何処へ消えたのか)

ただ涙が流れ続けている  
うねりがゆるやかに高まる度に  
何かが浄化されてゆく

探し続けてきた静謐さが  
思いもかけず、ここにある  
組み合わせられた掌の間——ここに、ある

それが分かれば  
あそこにも  
そして、そこにもあると分かる

(見ることもない、聴くこともない  
ただ体温を感じている——)

結局のところ  
生き続けることに恐怖していた  
怖れていた

だからこそ  
生き続ける  
涙はもう拭わない

生きるということは  
生きるということであり  
死の対義語ではない

(見ることもない、聴くこともない  
ただ体温を感じている——)

窓を開くと  
空と雲と風が見えた

(2012.7.18)